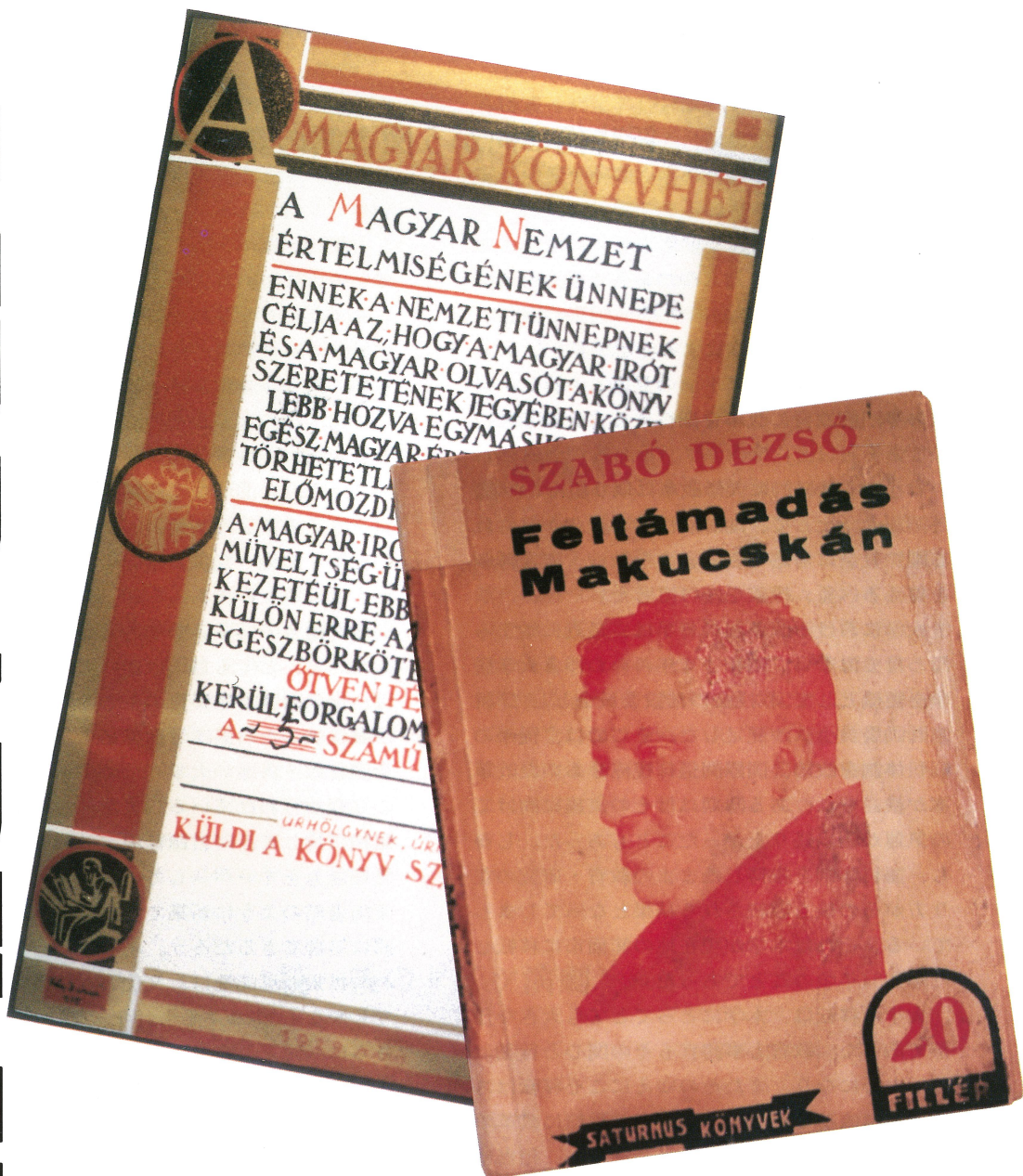


LIBRARY INFORMATION



新時代に向かう図書館への課題	図書館長 貝田 守.....	2
統一後のドイツ演劇	ドイツ語学科助教授 市川 明.....	3
パスパ文字と『蒙古字韻』のこと	中国語学科助教授 佐々木 猛.....	5
一図書館統計一		7
1991年度よく読まれた本一 (貸出図書ベスト30)		8
ハンガリー文献の関係場	ライシャワー研究所研究員 小島 亮.....	8
編集後記		12

大阪外国語大学附属図書館 1992.3.25

INFORMATION 第8号

新時代に向かう図書館の課題

図書館長 貝田 守

大学が冬の時代を迎えつつあると言われる。最近、各方面から大学のあり方への様々な批判、また反省の言などを耳にすることが多くなった。文部省も「大学設置基準」の見直しを行い、従来の専門的教育に改革を期待する方針を示したのである。

本学でも積極的に大学改革に取り組んでいる。外国語大学として、地球規模での変化が見られる国際社会に対応できるような教育・研究体制を整えるべく、模索を続けてきた。

大学における改革への着手は、最近に始まったわけではない。昭和44年のいわゆる大学紛争を契機として、教授会の常設委員会として「将来計画委員会」が発足した。そこでは、従来の語科体制を改め、国際関係に視点を置いた改革案が検討され、ある時期にはその実施に向けての気運が相当盛り上がったこともあった。しかし、語科体制を維持したままの教育・研究の在り方がその後も継続される結果となってしまっている。それは本学が現在地の箕面市に移転した昭和54年頃のことであった。

大学の移転は、本学にとってとても大きな仕事であった。教官も事務官もその関心と行動は移転中心になり、またそのゆえにこそ移転はスムーズに成功した。キャンパスの移転に改革のエネルギーが奪われたとは思わないが、相当に費やされたのは事実であった。そのような状況下でも、改革の一つとして「国際関係コース」が新設され、学生が大きな関心を寄せている。しかし、グルーピングという名で呼ばれていた語科の再編成の作業は未完のままであった。

二年程前から将来計画委員会が、新設置基準を踏まえて積極的に改革案を練ってきた。時として深夜に及ぶ討議が続けられた。そして、理想に燃えた改革の精神を隔々にまで盛り込んだ改革案が昨年の秋に出来上がった。

人員増は無しという厳しい結果ではあったが、文部省の一応の了解を得た。すぐさま準備委員会が構成され、今着々と具体的な段階へと進ん

でいる。また、外大ならではの特色となる「コミュニケーション科学研究センター」案も真剣に検討されている。そのように本学は大きな変革への第一歩を踏み出そうとしている。

では、この大学改革の流れに対し、図書館はどう対応していけばよいのだろうか。大学改革のあるなしに関係なく、図書館は大学の研究教育を支える重要な基盤の一つであり、情報資料の充実・整備・提供が根幹であることはいささかも変わらないであろうが、今図書館は様々な問題を抱えている。物理的側面での限界に直面している、とでも言えばよいのだろうか。例えば、従来の図書館資料の中心であった図書自体が酸性紙のため崩壊寸前である。このため、国会図書館・各地の大学等でマイクロフィルムでの保存が行われている。また、年々増加する出版物に対して、図書館は現在の蔵書数でも既に処理能力をオーバーしている。大阪大学生命科学図書館のように新築できれば、ある程度の期間は処理できるだろう。ところが、現有キャンパス拡張の可能性は、文化公園都市構想完成後でしかなく、少なくとも10年後といわれている。さらに、国家公務員の週休二日制完全実施で大学が土曜日に休むことになれば、図書館はどうするのか、開館するなら人員の確保をどうするのか、という問題もある。

ところで、図書館関係でもいわゆるニューメディアと呼ばれる媒体が増えてきた。CD・LD・VTRなどである。その中で、学術情報のCD-ROMが年々増えており、図書館現場でも必要不可欠になっている。従来は研究者が物理的に学術雑誌等を調べてデータを収集していたものが、パソコンに向かって検索することで必要なデータが得られる。しかも書き写し等の必要や間違いがない。各種のネットワークを通して商用データベースを検索すれば、それこそ膨大な情報を得られ、それが研究室のパソコンででき、必ずしも図書館という物理的場所へ行く必要がない。この4月からは、学術情報センタ

一では I L L (Inter-Library Loan) システムという文献複写・相互貸借のサービスが稼働を開始する。これも研究者が自分の研究室のパソコンから使用することを視野に入れている。本学も今春から導入すべく現在関係方面と調整中である。情報化の流れは、確実に図書館という物理的組織・形態を不必要とする方向へと向かっているように見える。つまり情報の電子化は、旧態依然とした図書館へ大きな変革を迫っているのだろうか。

語科が統合され、地域文化学科・総合文化学科が新設されるように、図書館も物理的資料と電子的資料を統合し、活用(利用ではない)できる能力が必要になるのではないか。

従来の図書館は、網羅的に図書を収集し、利用者の来館を待ち、所蔵する資料の範囲でサービス(貸出・レファレンス等)を行ってきた〔しかし、スタッフは必ずしも専門的知識をもっているわけではない〕。これは図書館として基本的な姿勢であり、“図書館”という形態をとる限りこれからも変わることはないだろう。しかし、この姿勢だけではもはや時代のスピードに対応することは不可能である。必要なデータならあ

らゆるメディア(当然商用データベースも入る)を使用しても利用者に提供する「情報センター」型への変革が強く求められるのではないだろうか。これに対応できる能力をもつスタッフの育成も非常に大きな課題である。現状では、一部にその動きが見られる程度であろうか。「利用者に必要な資料を提供する」という基本理念を踏まえ、図書館界全体で方向性を模索しなければならないのではないだろうか。

図書館のより良い姿を求めて、前進しなければならないわれわれであるが、道は遠く険しい感が深い。しかし、最近の週刊誌でとりあげられたような「資料の棺桶」というような状態では決してあってはならない。大学によって図書館の位置づけ・利用の方法は各々違うのものであろう。ならば、外国語大学としての本学での外大的なユニークな方法で、情報を常に活用できるように、キメ細かく配慮し、処置をしていかなければならない。そのためには、図書館に対する利用者各位からの要望や助言については謙虚に受け、それに応えていくつもりである。

統一後のドイツ演劇

ドイツ語学科 市川 明

2月の終わりの日曜日、僕は箕面の高原スケート場でスケートを楽しんでいた。連れてきた子供のことも忘れてしまうほど夢中になって、何十周もリングを回り続けた。思えば11年振り、ベルリン以来のスケートだ。ベルリンに留学していた頃、週末によくスケートをした。近くのスポーツ広場が人工のスケート場になり、1時から夜8時まですべれる。はじめてスケートをしに行ったときは夜でナイター照明が明るかった。近くにいる子供に「お金はどこで払うの」と聞くと、「そんなものはいらないよ、ただだよ」とびっくりしたような返事が返ってきた。「コートやかばんはどこに預けるの」「その辺に置いておけばいいよ。皆置いてるから」一なにをするにもお金がかからず、泥棒さんのいない平和な国

だった。だが社会主義の国、東ドイツはもうない。

ドイツ統一後、一年半がたとうとしている。クリスタ・ヴォルフの『引き裂かれた空』に始まり、イカルスモチーフを使った一連の詩や、映画『ベルリン、天使の詩』にいたるまで、なんと多くの「壁を描いた文学」が生まれたことだろう。でもその壁も、東ドイツという国が蜃気楼のように消え去ったとき、もろともなくなってしまった。ビザがとれないとき、一日ビザをとって東ベルリンに入り、夜の11時59分に壁を越えて西に出る。その足で0時1分に東に戻り、友だちの家に転がり込む。そんなシンデレラ(?)みたいな生活を送っていたのも、今から考えればなつかしい思い出だ。

だが統一はまだ完了していない。一級国民としてのヴェシー（西ドイツ人）と二級国民としてのオシー（東ドイツ人）の区別は厳然として存在しているのだから。失業や自殺、犯罪の増加、ネオナチズムの台頭など、大きな社会問題を東ドイツ社会は新たにかかえることになった。壁はなくなったけれど、心の壁はいつそう高くなったのではないか。東西の人たちが、違うことばで語るという状況が続いている。

* * *

ベルリンの友だちの家に置いてきたスケート靴はどうなっているだろうか。いっしょに仕事をし、文学や芸術を語り合った演劇人、作家たちはどうしているのだろうか。そんなことをときどき考える。文化庁の在外研修に友人の演出家が応募し、研修地にベルリンを希望したので、最近電話や手紙でいくつかの劇場、演出家と連絡をとった。どこもみな大変みたいだ。いちばん大きな問題は国民の劇場離れが急速に進んでいることである。91年9月に今シーズンが始まったが、東ベルリンのフォルクスビューネ（民衆舞台）では最初の3か月間は800ある座席の70-77パーセントが空席だったという。ディスコやテレビなどほかの娯楽に観客を奪われる傾向は、80年代にはいつ次第に顕著になってきたが、それでも東ドイツ国民の演劇好きは、つとに有名だった。人口1600万の国で、88/89年のシーズンにはのべにして1100万以上の人が芝居を観たという。だが89年秋からのシーズンに



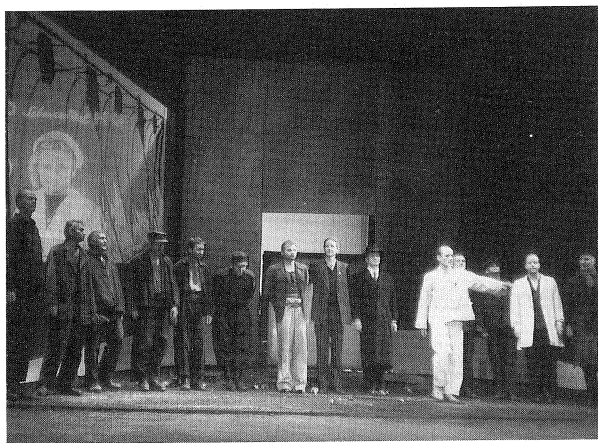
ベルリン国立劇場（東ドイツ）

は東ドイツ全体で500万の観客を失い、入場者数はほぼ半減してしまうのである。

89年の変革の頃、東ドイツ国民はデモに明け暮れ、テレビに釘付けだった。真実を包み隠さず報道するようになったニュース番組は何よりも国民を引きつけた。直接目にしたり、日々のニュースに流れる光景の方が、劇場での虚構の現実よりもずっとドラマチックで、インパクトが強かったからだ。現実の世界が芝居や、文学を乗り越えてしまった。そんな状態がまだ旧東ドイツでは続いている。

市場原理の導入により、入場料が値上げされたのも劇場離れに拍車をかけた。ドイツ劇場では最高12マルク（約1000円）だった入場料が昨シーズンから32マルクに、今シーズンからは43マルクになっている。看板俳優たちがギャラの高い西の劇場に移籍しはじめたため、がたがたになってしまった劇団もあると聞く。失業率がこんなに高くなると、国民は生活するのに精一杯で、芝居どころではないかもしれない。

だが新しい動きもある。東ベルリンの4大劇場のうち3つで、総監督が交代している。フォルクスビューネは若手のカストルフが就任し、学生や失業者のために5マルクの割引券制度を作り、巻き返しをはかっている。プレヒトの創設した劇団ベルリーナー・アンサンブルは、その古い演出法ゆえに、昔日の面影を失い、「プレヒト博物館」と酷評されていたが、レパートリーや劇団運営で新たな模索をはじめている。作



ドイツ劇場 ハイナー・ミュラーの『賃下げ野郎』
初演 88年3月

家のハイナー・ミュラーら5人が総監督に就任し、集団体制をしいているが、現在のところは目立った成果が上がっていない。ドイツ劇場とマクシム・ゴリキー劇場が統一前の勢いをそのまま維持しているのはうれしいことだ。特にドイツ劇場はトーマス・ラングホフが総監督になり、みずからもクライストの『ハイルブロン』のケートヒェン』を演出するなどして話題を呼んでいる。

西ドイツも東ドイツも日本とはくらべものにならないほど、文化に多くの予算をさいてきた。ベルリンをとってみても、西ベルリンには22、東ベルリンには約15の劇場（劇団）があるが、西ベルリンは年間約180億円、東ベルリンは約340億円の演劇予算を組んでいた。州や国からの補助金が、劇団の運営予算の80パーセント以上を占めているという劇団がほとんどだったのである。こうした制度そのものは、統一後もほぼそのまま受け継がれているので、東の演劇風景が激変することは外見的にはほとんど考えられ

ない。

問題なのは東の演劇人たちが、どこにアイデンティティーを求め、何を演じていくかということである。検閲をくぐり抜け、かろうじて上演にこぎつけた舞台はとにかく盛況だった。どっと笑いや拍手がおこる。「あれはね、ホーネッカーが最近いったことよ、声まで似せてる。」隣の席の友だちが説明してくれる。3か月もベルリンに暮らすと、政治的状況もわかってきて、笑いを共有できるようになった。あの頃は作者が暗号・隠喩で作品の中にこめたメッセージを解読する楽しみがあった。だが彼らが批判の対象としたスターリン主義、中央集権的社會主義は崩壊し、こうした作品はすっかり挑発力を失ってしまった。今、作家や演劇人たちは演ずる対象を求め、新たなる旅立ちを迫られているのである。統一後のドイツを描いた、面白い作品や演出が出てくるまでにはまだ少し時間がかかりそうである。

パスパ文字と『蒙古字韻』のこと

中国語学科 佐々木 猛

南宋の滅亡も決定的となった至元6年(1269)に、元の世祖フビライは次のような詔勅を下した。

朕惟うに、字は以て言を書し、言は以て事を紀す。此れ古今の通制なり。我が国家は基を朔方に肇め、俗は簡古を尚び、未だ制作するに違あらず。凡そ文字を施用するに、困りて漢楷及び畏吾字ウイグルを用いて、以て本朝の言を達す。諸を遼金これ以及遼方の諸国すべてに考うるに、例て各おの字有り。今、文治ようや寝く興るも、字書に闕くる有れば、一代の制度に於て、実に未だ備らざると為す。故に特に国師八思巴パに命じて、蒙古の新字を創つく為らしめ、一切の文字を譯さしむるは、言に順いて事を達するを期する而已なり。今自り以往は、凡そ璽書の頒降する者有れば、並に蒙古の新字を用い、仍お各おの其の国字を以て之に副えよ。

元朝におけるこの正式の文字は「蒙古字」「元国字」などと称された。現在パスパ文字と呼ばれるのがそれである。フビライの命を受けた国師パスパがその故郷のチベットで使用されていたチベット文字に改良を加えて作った表音文字で、元の統治下にあったすべての民族の言語を表記しうる、いわば国際的な文字体系であった。合計41の字母からなるが、チベット文字が左から右への横書きであるのに対してパスパ文字は左から右への縦書きである。ウイグル文字や漢字の書き方に従ったのであろう。また母音aは普通は表記されない。

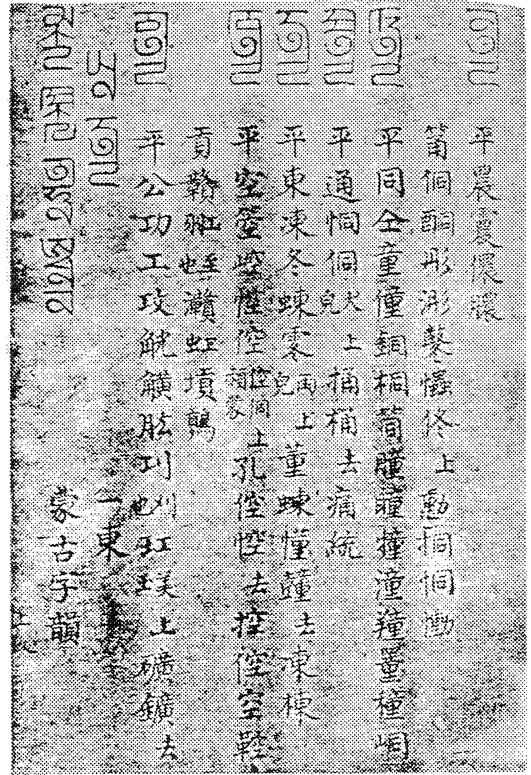
フビライは公文書はすべてパスパ文字で書き記し、各々の言語の文字をそえるように命じたが、元が滅びると一部を除いては用いられなくなる。

いま残っている資料は比較的多い。形の上で見ると、碑刻・官印・牌符・鈔・錢・権、それ

に若干の印刷物などがあり、記されている言語には、モンゴル語・漢語・チベット語・ウイグル語・サンスクリット語などがある。

このパスパ文字がアルファベットのような表音文字であることは、漢字音の歴史的研究にとってまたとない資料となる。とくに元の至大元年（1308）に朱宗文が校定した『蒙古字韻』上下二巻は、収めるすべての漢字の音をパスパ文字によって示した韻書で、『事林広記』に収められる「蒙古字百家姓」とともに最も組織的な資料として珍重されている。（たとえば写真に見える1東の韻の平声の最初の字「公」は gung と表記されている。）

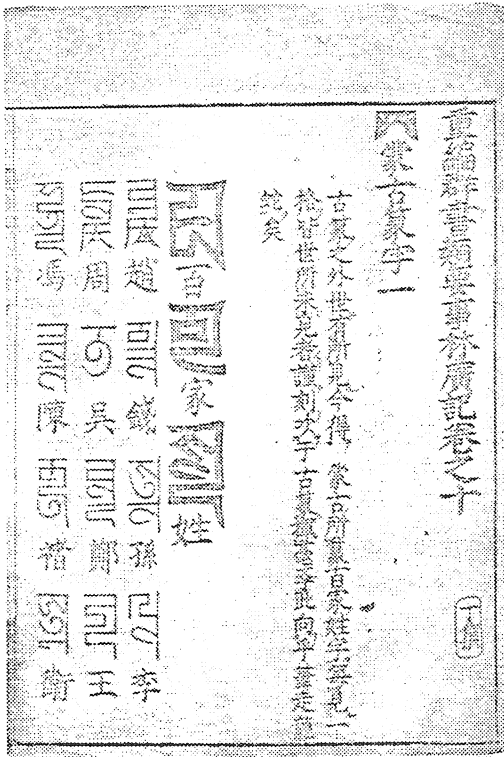
欠筆を検討することによって清の乾隆年間の筆写本であると考証された大英博物館所蔵のものが今日唯一のテキストである。日本においてもその価値は早くから注目されていたが、石浜純太郎博士は1921年に当地に赴いて写真を撮られ、その写真は専門家の間で回覧に供せられた。服部四郎の学位論文『元朝秘史の蒙古語を表す漢字の研究』は『蒙古字韻』を本格的に扱った最初の研究である。



蒙古字韻

その後1956年8月に関西大学東西学術研究所からこの写真にもとづいた影印本 500部が出版されたが、ちょうどその翌月に著名な音韻学者の董同龢がアメリカから中華民国への帰途に来日されたおり辻本春彦先生から一部が贈られた。そののち台湾大学と歴史語言研究所がそれぞれ一部を得て、これを利用して鄭再発は『蒙古字韻及びパスパ字と関連する韻書』を完成させた。また橋本萬太郎が続々と関連する研究成果を発表するが、そのうち『広韻』との対照表は辻本先生の研究にもとづいたものである。

更に1987年には北京の民族出版社から『蒙古字韻稿本』が出版された。関西大学東西学術研究所の影印本の更なる影印本であるが、関西大学影印本が誤って右開きに綴じたのを正しく左開きに綴じ直している。また大英博物館蔵本にもともと欠けていた巻下の巻末の数葉を補足し、パスパ字で記された各音節のローマ字転写一覧表を付け、更に本文の校勘記を付けている。これらの資料によって我々はいよいよ確実に元代漢字音の研究を進めることが出来るようになったといえよう。



蒙古字百家姓

*** 91年度 分類別貸出統計 (学生) ***

92年3月14日 調

月	I 部				II 部					大 学 院		そ の 他	計	時 間 外
	1 年	2 年	3 年	4 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	1 年	2 年			
4	200	254	363	725	60	38	60	124	143	111	33	118	2,229	685
5	395	446	776	1,148	111	94	129	212	244	156	44	212	3,967	1,456
6	378	558	781	1,107	58	102	160	236	211	130	59	150	3,930	1,463
7	348	589	706	1,194	88	167	227	295	287	196	48	186	4,331	1,322
8	66	135	169	328	29	20	54	58	73	17	2	36	987	0
9	1,108	1,109	1,431	2,358	221	217	312	357	467	155	29	141	7,905	2,423
10	914	1,001	1,710	4,420	199	309	318	425	562	316	66	374	10,614	3,877
11	464	726	1,236	2,784	109	154	219	286	473	136	50	210	6,847	2,422
12	446	533	1,062	2,255	161	151	249	281	338	132	36	146	5,790	2,029
1	677	568	1,154	1,155	193	184	251	296	250	95	33	193	5,049	2,079
2	798	918	1,244	836	200	220	347	360	177	83	17	132	5,332	2,002
3	40	39	103	55	18	13	22	31	14	33	5	16	389	0
合計	5,834	6,876	10,735	18,365	1,447	1,669	2,348	2,961	3,239	1,560	422	1,914	57,370	19,758

*** 91年度 分類別貸出統計 (学生) ***

92年3月14日 調

区分	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	そ の 他	計		
	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	美術	語学	文学		冊数	人数	開架冊数
4	158	115	301	489	37	36	33	86	505	464	5	2,229	1,299	1,927
5	350	211	544	988	59	85	53	82	747	848	0	3,967	2,309	3,422
6	350	190	544	949	86	141	110	91	662	806	1	3,930	2,380	3,414
7	295	214	639	1,017	87	136	93	115	865	865	5	4,331	1,969	3,749
8	59	54	132	287	28	35	12	20	171	188	1	987	376	844
9	543	595	948	2,227	558	195	108	178	1,254	1,290	9	7,905	2,477	7,067
10	1,129	600	1,441	3,001	204	289	176	270	1,720	1,780	4	10,614	3,092	8,670
11	985	318	943	1,726	100	116	128	166	1,077	1,288	0	6,847	2,537	5,349
12	418	388	799	1,650	122	113	88	180	987	1,042	3	5,790	2,994	4,907
1	429	423	698	1,352	207	97	58	163	905	712	5	5,049	2,808	4,431
2	313	388	752	1,303	260	159	70	175	974	938	0	5,332	2,666	4,861
3	43	25	50	71	17	5	7	9	93	69	0	389	169	336
合計	5,072	3,521	7,791	15,060	1,765	1,407	936	1,535	9,960	10,290	33	57,370	25,076	48,977

1991年度—よく読まれた本—(貸出図書ベスト30)

943.7	6	モモ／ミヒヤエル・エンデ作；大島かおり訳
255	47	イスパノアメリカ；植民地時代／チャールズ・ギブソン著
815	298	日本語文法入門／吉川武時著
932	194	シェイクスピア全集；1／シェイクスピア著
332.25	191	インド経済概論／V. N. パラスプラマニヤム著
913.6	R	うたかた／サンクチュアリ／吉本ばなな著
913.6	R	つぐみ／吉本ばなな著
810.7	81	講座日本語と日本語教育；13／杉藤美代子著
225.05	9	インド民族運動史；ガンディーとイギリス植民地支配／山田晋著
302.25	119	もっと知りたいインド；1／佐藤宏〔ほか〕編
810.7	81	講座日本語と日本語教育；4／杉藤美代子著
913.6	R	ノルウェイの森；上,下／村上春樹著
209.6	21	世界現代史；23
233.07	7	イギリス現代史／A. J. P. テイラー著；都築忠七訳
236	144	スペイン史概説；その文化、人物、エピソード
801.6	113	レトリックと人生／G. レイコフ M. ジョンソン著
810.7	75	外国人のための日本語 例文・問題シリーズ；7／名柄迪監修
815	303	基礎日本語文法／益岡隆志 田窪行則著
209	351	大航海時代／増田義郎著
236	144	スペイン語概説／茨木晃著
236	214	概説スペイン史／立石博高 若松隆編
236.04	37	スペインとイスラム；あるヨーロッパ中世／G. サンチェス
801	1392	教養のための言語学コース／小泉保著
801	1404	言語学を学ぶ人のために／西田龍雄著
801.01	211	英語語用論／S. C. レヴィンソン著
810.1	46	言外の言語学；日本語語用論／小泉保著
810.7	57	日本語初級文型の教案「研究」；『基本文型』
815.9	9	日本語のシンタクスと意味；1／寺村秀夫著
913.6	R	ダンス・ダンス・ダンス；上,下／村上春樹著
933.7	622	クリスマスの思い出／トルーマン・カポーティ著；村上春樹訳

ハンガリー文献の関係場

ハーヴァード大学ライシャワー研究所研究員 小島 亮

わが国ハンガリー語学研究の若手精鋭、早稲田みか講師の仲介により、私の収集したハンガリー語文献がこのほど大阪外大図書館に収納されることになった。

私の集めた文献はハンガリー研究者の個人蔵書にも劣るほんのささやかな基本的コレクションに過ぎないものであるが、ハンガリー国内の物価上昇率から考えて、将来、同規模の文庫設立のためにさき私の払ったコストを数倍も上回る経費を要するに相違ない。

私のハンガリー滞在期間は1988年1月から約4年間に及び、首都ブダペストのみならず、ハンガリー人ですら退屈をもてあますという東部大平原のデブレツェンにも約2年間「禅修業」の思いを込めて籠城したことが私の自慢である。

私の一般的に認知されている専門は日本近代思想史研究であるが、ハンガリーという別個の社会、歴史システムを分析的に対象化する作業は、私をしてゼネラリスト足らしめざるを得なかった。本学に寄贈した文献類に決定的な焦点

を欠如するかのごとく感知されるものは、かかる私の研究姿勢の素直な反映に他ならない。

とは言え、狭義の研究を離れても、書を探究し、書をめぐって人と遭遇する悦楽は私の幸福概念の根本に関わる、しかし最も安上がりな「知的遊戯」でなければならなかった。かくて書店めぐりは、私のハンガリー滞在中、約600回に及ぶ映画館通いと合わせて、私の社会解読のための最も有用な鍵であり、最も心踊る知的アクションでもあったのである。

加うるに、次のようなハンガリー国内の情報のアクセス機会の問題が、本屋通いをほとんどマニア化させた背景に存在していたかも知れない。

ブダペストの場合、国立セーチェニー図書館にはほぼ全ての分野の専門研究員がいてかなり本格的なビブリオグラフィーを編纂する能力を所持している。都立サボー・エルヴィン図書館も社会科学のスタッフを擁し、定期的にビブリオグラフィーを刊行する能力を保持し、専門図書館に準ずる力量を有している。ところが大学図書館や科学アカデミー図書館くらいのクラスになると、インフォメーションの機能が未だしという現状に留まっており、図書館を戦略的に利用するために、研究者はそれぞれ自前のソフト開発能力を磨かねばならなかったのである。更には、徳永康元氏が「ブダペストの古本屋」でオマージュを捧げたような職人的古本業者も社会主義時代に消えうせたから、古本屋を利用するためにさえこちら側の力量がものを言ったのである。

さて本稿では、大阪外大でのハンガリー研究の進展とハンガリー文献利用の扇動もかねて、ハンガリーの書籍「場」をめぐる私的注釈を加えて見たい。

古本屋

ハンガリーの古本屋は淘汰のただ中にあり、本稿が公表される時点で既にして状況が変わっているかも知れない。

現在進行形のプロセスというのは、手短かに言えば、国営の非専門家事務員によって営まれてきた中間平均型書店から高級専門店と大衆向け書店への分化である。

同時に店数も漸減中にあり、活字離れとビデ

オ・メディアへの代位という一般的趨勢はハンガリーにおいても進行している。

社会主義時代の国営ショップといっても、人間が営む店舗たる以上、無論それぞれ他に代えがたい特色を有していた事実は特記するに吝かでない。私は、愛らしい鼻のマークの国営古本屋を心底から愛していた事実にいまさらのように気付くのである。

新政権になってから次々に閉店に追い込まれた古本屋の店先に立ち止まり、奇妙な喩えを用いれば、秘かに愛でてきた雑草の花を筆りとられたかのような無念をかみしめては一人涙を殺していた。消えた古本屋の棚は、私のハンガリーそのものであったし、そのハンガリーは確かに薄汚れてはいたが、私にしか理解のできぬ記号群で囲まれていたのである。

ネップシンハーズ・ウーツァの店やレーニン（現テレサ）クリュートの古本屋がもはや存在しないというのは、私の人生にとって何事かではあるのだ。センテンドレの古本屋も雙脚の主人の死とともに地上から消えうせた。これも今は亡きバルザック・ウーツァの私設古本屋は、気さくな女主人がいつもコーヒーを入れてくれたものだった。

どうか愚にも付かぬ地名を列挙するのをお許しいただきたい。アールパード・ウート、ムンカーシュオトホン・ウーツァ、マヤコフスキー（現キーライ）ウーツァ、バイチ・ジリンスキ・ウーツァ、カーロイ・ミハイ・ウーツァ、ヨージェフ・クリュート、カールマン・ウーツァ、バーチ・ウーツァ、マルチロク・ウート、ラヨシュ・ウーツァ、ソンディ・ウート、バルトーク・ペーラ・ウート、トゥクリ・ウート、ボソロメンニ・ウート、ムーゼウム・クリュート、ヴァールフォキ・ウーツァ、オルサーグハーズ・ウーツァ、デブレツェン、ソルノク、セグド、ベーケーシュチャバ、ケチケメート、エゲール、ペーチ（三軒のうち一軒はビデオ屋になった）、シヨプロン、ジュール、ソンバートハイ……これらの古本屋は今後も健在だろうか？

街頭書店

私はシュタンドと俗称されるハンガリーの街頭書店に寄せて56年反乱の文献に関する準ビブリオグラフィーをまとめたことがある。（「丁卯」

5号)

ハンガリーを訪れた人なら路上の民芸品売りや闇ドル買いそして街娼などと並んで簡易店舗の街頭書店を即座に思い出すに違いない。

私見を述べれば、ハンガリー名物のシュタンドも、他の3つの路上生活者と同時に遠くない将来消滅の運命は免れまい。

私は、前述の文章の中で、街頭書店をハンガリーの政治的転換期の象徴として描いてみたのであるが、80年代末の状況を「街頭書店の英雄時代」と仮称して見るならば、此の4年ほどの間に街頭書店は次のような四季を通過したといえそうである。

まず第一期はカーダール政権末期の様相である。シュタンドに並ぶ本は一般書店のものと変わりなく、モスクワ広場や西駅周辺などターミナル周辺路上に立地するという条件が客を引き付けているに過ぎなかった。採算がとれた秘密は、ゾッキ本を定価販売していたため、マージン率が高かったからである。

この時期のハンガリー読書界においてゾッキ本になる確立の高かったジャンルは社会主義書、学術書そして「その他」だったが、シュタンド本は大体が「その他」の雑本とわずかな学術書よりなり、間違っても社会主義書を並べる愚は犯さなかった。

次いで私の言う「英雄時代」とは、1989年を挟む前後1年を指す。出版の自由が確立されて小出版社が雨後のタケノコのごとく簇生し、旧来タブーだった書籍がせきを切ったように次々と刊行され、一般の書店に並べられる遙か前にこれらの書籍をシュタンドに見出しえたのである。欧米のハンガリー語出版社、例えばニューヨークのピュシュキ・キアード専門のシュタンドや新政党の出版物専門のシュタンドまで登場した。この時期のハンガリーの広場や道路は、相次ぐ葬式とデモで活気ずき、熱気に包まれた群衆の傍らには必ずシュタンドが開店していたものである。

第三期は新政権誕生後である。建物から共産党のシンボル・赤い星が撤去されブダペストではピンクのネオン・サインが輝き始めたこの時期、シュタンドの機能に大きな変化が見られ始めた。1989年12月のクリスマスに焦点を合わせ

た「半ば夢」(監督名失念)は、此の時期のブダペストを街頭少年の目から撮った現代版「パール街の少年たち」といえるが、この「パール街の少年たち」ならぬ「ラーコーツィ街の少年たち」が路上を駆け回っていたとき、歩道上には街頭賭博師(コタル・ペーテル監督の「アメリカのように」のニューヨークの賭博師を想起されたい)という新商売が出現し、シュタンドはポルノ・ビデオ・ショップに化けおおしていたのである。風刺漫画誌「ルーダシュ・マーチャイ」には毎号のごとくポルノグラフィーに埋もれたブダペストの状況が描かれたものだったが、実際、それは誇張ではなかった。だが、やがて法規の改正により形振かなわぬポルノグラフィーの販売にピリオドが打たれ、シュタンドの冬の時代とも言うべき第四期に突入したのである。

第四期とは、かくて現在進行形の姿で、シュタンドが死滅しつつある過程を指す。

書店も自由競争のただ中におかれ餓死の自由が与えられたから、今やゾッキ本を定価販売する大名商売はできないし、逆にシュタンドはディスカウント競争に追い込まれ、本では食えなくなった分を生ビデオ・カセット、スウェーデン製の薬酒からコンドームに至る雑貨を売り捌く路上闇市場を兼ねることになったのである。

ゾッキ本のディスカウント専門店としては、古くからバーチ・ウート(バーチ・ウーツァではない)沿いに大型店舗が店を構えており(ゲルゲイ・ウーツァの学術書ゾッキ本専門店は何軒も外資系輸入店となった)、シュタンドの「本屋」たる部分は専門の大規模店に今後完全に客を奪われるだろうから、ハンガリーの街頭書店もまもなくその歴史を閉じるに相違あるまい。

地方出版

ハンガリーの地方出版は、20世紀に入ってからだけでも輝かしい歴史を持っている。それは例えばデブレツェン、コロジュヴァール(現ルーマニア、クルージ・ナポカ)、ベーケーシュチャバという中規模都市を拠点とした出版文化に思いを馳せるだけでその一端に接しえるが、出版業衰退後も、これらの都市には有力な図書館が継承され、往時を忍ぶよすがとなってきた。

もちろん戦後においても地方史の出版などは営々と続けられてきたのであるが、商業的出版社という企てはたび重なる試みにもかかわらず失敗に終わってきたと言ってよい。ところが新政権誕生と東ヨーロッパ全体の構造的変貌により、デブレツェンのチョコナイ・キアード、セゲドのヨージェフ・アテイッラ大学出版部、ペーケーシュチャバのタバノ・キアードなどの地方出版社の創業が相次ぎ、このところ地方出版が再びよみがえりつつある。このうちチョコナイ・キアードに関しては、私もエヴァ・ペーリ・アールパードネー氏とのインタビューを踏まえた小論を発表しているのでぜひとも参照されたい。(「週刊読書人」1990.11.26)

地方出版の再興隆という一見控えめな現象は、ハンガリーのみならず周辺地域総体の関係構造の変化と関わっており、その意義を把握するためには少し周り道をした考察を要請する。

地方出版の拠点となっていたデブレツェンなどの都市は、今日でこそ国境線の内側にほんの一寸入ったばかりの辺境都市に過ぎないが、第一次世界大戦終結前までは文字どおりの中心都市であった。トリアノン条約によってハンガリー側に極度に不利に国境線が引かれ、これらの都市は歴史上初めて辺境と化したのである。そして自由と繁栄をもたらす筈であった民族自決の思想は、バルカン—中欧地域では誠にパラドキシカルに機能し、むりやり作り出した「民族国家」を防衛するために国境の壁を異常なまでに高くさせ、結果的には歴史的に展開していた分業を断ちきり「民族国家」の境界線付近を荒廃させてしまったのである。この経緯は、戦後の社会主義体制に受け継がれた。戦後社会主義準世界体制はハンガリーのトリアノン国境を基本的に承認した上で「一国社会主義」の建設を目指したが、これは正しい意味で「民族国家」という20世紀の神話を徹底したものであったのである。そして国境を超えて往来する歴史的民族の存在は「一国社会主義」をおびやかす反革命的なものとして弾劾され、ときには暴力的抑圧すら受けたから、社会主義の建設の度合いと辺境の荒廃とが比例し、今や辺境と化した中規模都市の出版文化も根柢にされたのである。

伝統的な地方拠点都市に替わって新興拠点都



サボー・デジー

市・レーニンヴァーロシュ、ドゥナウーイヴァーロシュなどが建設されたが、これらの都市は地方の振興のために寄与はせず、ブダペスト中心型の社会分業を強化したにすぎなかった。

この文脈で捉えて見る時、地方出版の再興は、単なる「地域興し」と言った次元ではなく、ハンガリーの近代社会での運命全体の再検討と密接に関係することが了解されよう。デブレツェンのチョコナイ出版社が戦間期最大のベストセラーにして反ルーマニア的扇動と反ユダヤ主義ゆえ戦後長らく禁書となっていたサボー・デジーの「潰された村」を復刊し、また国境外のハンガリー語出版社と現在のウクライナ共和国に住むハンガリー人の小説を提携出版した意味は単に新刊の話題提供に留まらないものである。

レプリント

ハンガリー文化史上、一種の百科全書の時期というものが存在していた。

西欧の水準にはやや劣るとはいえ、本格的な百科事典を目指した「レーヴァイ・レキシコン」全22巻が完結した戦間期は、同時にキーライ・エジェテミ・キアードの大冊シリーズ「ハンガリー史」全5巻「ハンガリーの人と土地」全4巻「ハンガリー文化史」全4巻の出そろった時期でもあった。

これらの出版物は、社会主義時代においてもスタンダードな知の体系として圧倒的な読者を持ち続けてきた文献で、一寸した知識人の書架には必ず並んでいたものである。

この百科全書的スタイルの知の形は社会主義時代の科学アカデミーの出版物にも受け継がれ

たが、政治的配慮と無縁でありえなかったため、知的正統性をもっていたとはいえず、ハンガリー人は実に戦前の大冊を古本でずっと読み続けてきたわけである。

私は、比較社会思想史的見地から、ハンガリーのこの戦間期のシリーズ物を格別注意深く考えて見たく思っているものである。

一般的に言って、社会思想とは社会の現実を説明し、社会のプログラムを提起し、社会の多数派を説得しようとする言葉と雰囲気システム、並びに思想学派の生活の再生産にかかわるサブ・システムを指す。システムであるという認識は、一つには社会思想の「本質」を求める式の方法を拒否し、二つには、思想と思想との間の主体的関係場において、アジェンダが生まれ、これらをそれぞれの思想は回答義務を持つという知見をさしあたり結果する。社会思想の時系列変化は「様々なる意匠」の交代の歴史でもないし、「支配的イデオロギーは支配者のイデオロギー」だとはいえないのだ。とは言え、思想の関係場の中で、多数派獲得に成功し、学校や学会などの暴力装置を支配しえた思想を「制度化された思想」と呼ぶならば、この制度的パラダイムをいかに超越できるかどうかは思想の「深さ」を議論する目安となろう。

さて、ハンガリーの研究者が一般的に提唱し、日本でも追従者に事欠かないハンガリー近代思想史の説明法は、第一次世界大戦後、社会思想が「近代主義」から「民族主義」に変化をしたとするものである。「民族主義」とは本来的にモダンな考えだから、この説は実のところ論理になっていないのだが、期するところは、ユダヤ

人によって指導された素朴近代主義が反ユダヤ的ナショナリズムに取り替わったと述べたいわけである。おまけを言えば、この説明法は1930年代に台頭する「第三の道」を「近代主義」と「民族主義」の「統一物」だと主張して見たい様子である。

私は、これに対し素朴近代主義の代表格に挙げられるヤーシ・オスカールの近代社会のイデアリステイックな像「第三の道」のエルデイ・フェレンツ等にも完璧に継承されていることに注目し、「近代主義」=「民族主義」のパラダイムがトリアノン条約以降「一民族一国家」となったハンガリーで「第三の道」として完成したという仮説を提唱した。(博士学位論文)ここで私が実際に「直感」的に、いわば論理以前に気付いたのは、二重帝国期のハンガリーの社会・文化・学術の制度化たる百科全書的刊行物が戦間期に集中的に出されたという事実だった。

ところで話を急いでもとに戻さねばならない。今ここで論じた百科全書的著作類は、「レーヴァイ・レキシコン」を始めそのすべてがレプリントされつつある。

政府の出版助成に依拠しない独立出版社の事業ゆえ、各巻の定価は極めて高く、売行きも予想されていたほど伸びていないらしいが、若手の知識人の座右におかれる程度には普及したであろう。

現在のハンガリーはいかなる時代にもまして「レプリントの季節」といえようが、いまさらながら、社会主義政権下で出版されえなかった書の多さに驚かざるを得ないのである。(1991.12.4 マサチューセッツ州ケンブリッジにて)

編集後記

☆現在、アメリカ在住、ハーヴァード大学ライシャワー研究所研究員の小島亮氏(社会学博士)からハンガリー関係図書約900点の寄贈があり、目下、その整理作業中であるが、この小誌に対して、同氏より特別寄稿していただいた。

☆表紙の写真は、同寄贈図書中のサボー・デジー〔Szabo Dezső(1879~1945).ハンガリーにおける第一次世界大戦後の代表的作家〕の小説及び論説集の標題紙である。

☆1991年度の貸出統計を掲載したが、年間貸出冊数は学生・教職員を合わせて6万冊を突破した。そのうち、開架図書の貸出は85%以上となっている。

LIBRARY INFORMATION

— 第 8 号 — 1992年3月25日
編集発行 大阪外国語大学附属図書館
印刷 (株)ユニワールド印刷センター